

待兼山俳句会

第六百九十九回

世話人

山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和七年四月二十一日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・東野太美子・向井邦夫
森 茉衣・山田安廣

投句者

碓井遊子・西條かな子・寺岡 翠・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子・東中 乱
平井瑛三 以上出席者十名＋投句者九名 計十九名

兼題

豆の花・暮の春（幹三） 朝寝・雀の子（暁子）

当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和七年五月十九日（第三月曜日）会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時
兼題 罌粟の花・薄暑（幹三） 樟若葉・薔（暁子） その他当季雑詠

選者吟

谷あひの一村ごとにある暮春

幹三

人といふものを覚えし雀の子

雨音にいよよ深まりゆく朝寝

様々な音聞いてゐる朝寝かな

暁子

足音の来ては遠のく朝寝かな

豆の花一家の靴を干す庭に

幹三選

降る雨の調べ楽しむ朝寝かな

ばたばたと羽音拙き雀の子

トタン屋根こつこつ弾む雀の子

結願湯へとやまざくら山桜

◎人の世を窺ふやうに豆の花

朝寝して今日青空に開く窓

着陸の許可を待ちたり暮の春

一列に口ばかりなる雀の子

亡き猫が駆け抜けたかと暮の春

雀の子路地の平和を見つけたり

日差し背に川に沿ひ行く暮の春

久々の田舎芝居や豆の花

子雀の柔き温もりたなごころ

花びらが石段覆ふ紫木蓮

恵子

兵十郎

堯子

遊子

太美子

兵十郎

遊子

安廣

茉衣

盛雄

邦夫

安廣

堯子

茉衣

こんもりと一畝豆の花のぞく

寄り添うて見下すばかり雀の子

◎朝寝とは先祖返りや澄みし空

◎豆の花一家の靴を干す庭に

◎もて余すチョコレートパフェ暮の春

雀の子はや逃げることに知つてをり

◎二つ三つつまんで通る豆の花

旅帰り家の寢床の朝寝かな

◎足音の来ては遠のく朝寝かな

◎短冊は母の筆なり暮の春

暮るる春ゆるゆる登る小海線

ポストまで遠回りせむ豆の花

旬日を経ずに子雀飛ぶ構へ

木の国の筏流しや暮の春

太美子

太美子

兵十郎

暁子

眞知子

暁子

眞知子

暁子

暁子

かな子

和江

輝子

輝子

盛雄

幹三 特選句講評

・人の世を窺ふやうに豆の花

太美子

小さな花がたくさん集まり賑やかに咲く。かわいいところもありその様子がそつと「窺う」ようだという見立てに賛成いたします。

・朝寝とは先祖返りや澄みし空

兵十郎

三代四代前のご先祖ののどかな時代の気分なのか、もつともつと戻ってまだ文明の無い自由な動物の頃への憧れか。いろいろな解釈ができる楽しい句です。朝寝の気分よさがよく伝わってきます。

・豆の花一家の靴を干す庭に

暁子

豆の花の庶民性が詠われました。ずらりと干された靴にそ

の家族家庭の暮しが垣間見えます。取り合わせの効果がすばらしい。

・もて余すチヨコレートパフェ暮の春 眞知子

力まず軽く、その場でさつと作られた句という印象があり、そこに好感が持てる訳ですが、この「事態」を五七五にまとめるのはなかなかの力が必要です。うまい。

・二つ三つつまんで通る豆の花 眞知子

春の明るい道を鼻歌交じりで歩いている、そんな様子が目に浮かびます。そんな時似合うのが豆の花。やはり豆の花は愛される存在なんですね。

・足音の来ては遠のく朝寝かな 暁子

覚めているでもなし、眠っているでもなし…いちばん気持ちのいい状態です。家族の足音か往来を行く人の足音か、感

覚の霞んでいるさまが実に朝寝らしい。

・短冊は母の筆なり暮の春

かな子

きつと優しい筆跡なんでしょうね。暮の春、春を惜しむ気持ち
ちが母を思い出させるのでしょうか。晩春と初夏の微妙な合
間によく響く内容です。

暁子 選

◎加速して加速して春闌けてゆく

太美子

◎濃き淡き色を残して暮の春

堯子

◎久々の田舎芝居や豆の花

安廣

一列に口ばかりなる雀の子

安廣

暮るる春ゆるゆる登る小海線

和江

人といふものを覚えし雀の子

幹三

樺林の色変へる風暮の春

兵十郎

そら豆の花は空へと飛ぶかたち

幹三

春岬巡りバテレン隠れ里

遊子

寺町の屋根屋根覚え雀の子

幹三

無人駅出入りするのほ子雀ら

和江

見舞はれて娘に諭されてのどけしや

太美子

予定なく心ゆくまでする朝寝

茉衣

結願湯へとやまざくら山桜

遊子

起きるのを待つ人もなき朝寝かな

朱美

木の国の筏流しや暮の春

盛雄

◎降る雨の調べ楽しむ朝寝かな

恵子

◎雨音にいよよ深まりゆく朝寝

幹三

イベントを終へし至福の朝寝かな

恵子

生きてゐるかと思はれる朝寝かな

太美子

すき腹の猫に起こされ朝寝覚め

茉衣

もて余すチョコレートパフェ暮の春

眞知子

暁子 特選句講評

・加速して加速して春開けてゆく

太美子

・濃き淡き色を残して暮の春

堯子

日当たりのよいところにはんの少し緑が見えたかと思
うとどんどん広がり、加速度的に緑が増す。様々な蕾が
姿を現すのを眺めているとたちまち膨らみ、色彩豊かな
花が開く。思うまでもなく濃き淡き色を残しつつ、もう初
夏の日ざしに新緑となる。両句は春から夏にかけての季
節の移り変わりの特徴を「加速」や「濃き淡き色を残し
て」と表現された。

・久々の田舎芝居や豆の花

安廣

今もあるのだろうか、昔は旅回りの一座が来ることが
あった。町や村の空き地に急拵えの芝居小屋が出来、幟
が何本も立ち、一週間ほど興行した。或いはこの句の場
合、村人たちの演じる奉納芝居のようなものかもしれな
い。いずれにしても畑がすぐ近くにあつて、豆の花が咲
いている。季語「豆の花」は豆類の花の総称であるが、主

に春に咲く蚕豆、豌豆を指す。隠元、ささげ、小豆、大豆
などは夏に咲く。

・降る雨の調べ楽しむ朝寝かな

恵子

・雨音にいよよ深まりゆく朝寝

幹三

朝寝と雨は相性がよい。何故か雨の日の朝寝は心地よ
い。しつとりとした空気、単調な雨音のリズム、眩しい日
ざしも入ってこない。朝寝を楽しいと感じ、眠りを深め
てゆかれるのは平素忙しく活動している人だろう。この
二句はそんな人の朝寝の心地良さを描かれた。

互選三句

朱美 選

降る雨の調べ楽しむ朝寝かな

恵子

イベントを終へし至福の朝寝かな

恵子

日差し背に川に沿ひ行く暮の春

邦夫

暑くも寒くもなく気持ちよくどこまでも歩かれたのかな。

瑛三 選

トタン屋根こつこつ弾む雀の子
谷あひの一村ごとにある暮春
よく笑ふ媼ふたりや豆の花
貸農園の風景か。よく笑ふが豆の花によくマツチ。

堯子

幹三

幹三

和江 選

豆の花一家の靴を干す庭に
朝寝覚むひとり旅する夢を見て
寺町の屋根屋根覚え雀の子
はや、たくましく生きる力を感じます。

暁子

輝子

幹三

かな子 選

見舞はれて娘に諭されてのどけしや
朝寝してもう誰からも叱られず
生きてゐるかと覗かるる朝寝かな
家族に愛された人生の最高に幸せな老境。

太美子

暁子

太美子

邦夫 選

雀の子路地の平和を見つけたり
降る雨の調べ楽しむ朝寝かな
豆の花の紫の目に見つめらる
白・紫・黒から成る蚕豆の花に見詰められる作者。

盛雄

恵子

乱

恵子 選

ポストまで遠回りせむ豆の花
様々な音聞いてゐる朝寝かな
旅帰り家の寝床の朝寝かな
旅から帰り自分の布団が最高、至福の朝寝。

輝子

暁子

暁子

堯子 選

山の畑広き空なり豆の花
豆の花為さねばならぬ事多し
谷あひの一村ごとにある暮春
各地の華やいだ季節の終わりが美しく表現されている。

安廣

かな子

幹三

太美子 選

谷あひの一村ごとにある暮春
久々の田舎芝居や豆の花
様々な音聞いてゐる朝寝かな
これこそ朝寝の至福の境地が詠まれている。

幹三

安廣

暁子

輝子 選

樺林の色変へる風暮の春
朝寝して今日青空に開く窓
もて余すチヨコレートパフェ暮の春
大好きなパフェにも気が乗らない。春愁の所為ですね。

兵十郎

兵十郎

眞知子

兵十郎 選

雨音にいよよ深まりゆく朝寝

幹三

バッグから一枚取り出す暮の春

恵子

そら豆の花は空へと飛ぶかたち

幹三

豆の花は羽根を持つように見える。飛ぶと思う楽しさ。

茉衣 選

雨音にいよよ深まりゆく朝寝

幹三

久々の田舎芝居や豆の花

安廣

花が葉に見事に変はれり暮の春

朱美

朝窓開けて眺めた木蓮や石楠花などがみな若葉に変容。

眞知子 選

健気やな鉢の豆にも小さき花

安廣

ガラシヤの幽閑地訪ふ暮の春

茉衣

久々の田舎芝居や豆の花

安廣

豆の花の咲く頃の田舎芝居がふと郷愁を誘う。

翠 選

夫の淹るる珈琲旨し朝寝かな

かな子

そら豆の花は空へと飛ぶかたち

幹三

山の畑広き空なり豆の花

安廣

遮る物のない畑で太陽をたっぷり浴びて豆は良く育つ。

盛雄 選

車椅子押して校門春深し

安廣

短冊は母の筆なり暮の春

かな子

足音の来ては遠のく朝寝かな

暁子

近づいて来て遠のく足音に朝寝の一時が愛おしい。

安廣 選

足音の来ては遠のく朝寝かな

暁子

生きてゐるかと思はるる朝寝かな

太美子

短冊は母の筆なり暮の春

かな子

母の短冊を懐かしむ暮春の日を気持ちよく表現された。

遊子 選

寺町の屋根屋根覚え雀の子

幹三

暮の春サヨナラダケガ人生と

堯子

谷あひの一村ごとにある暮春

幹三

谷間の村ごとの暮春。そのニュアンスが気になる一句。

乱 選

豆の花遺伝の仕組知りし頃

輝子

朝寝してもう誰からも叱られず

暁子

よく笑ふ媼ふたりや豆の花

幹三

お互いよく似る媼、豆そして豆の花。可笑しみあり。

参加者自選句

豆の花親は可愛く子はたくましく シューウインドウの造花は散らず暮の春 せせらぎの紙漉く里に豆の花 短冊は母の筆なり暮の春 矍鑠たる恩師囲むや暮の春 一人立ちしても気になる雀の子 暮の春サヨナラダケガ人生と 生きてゐるかと思はるる朝寝かな パン焼くる匂たのしみつつ朝寝 撫林の色変へる風暮の春 ガラシャの幽閑地訪ふ暮の春 淀みゆく嵯峨野界限暮の春 朝寝してブランチ美味し老い独り ねそべりはモーと一声山笑ふ 一列に口ばかりなる雀の子 春岬巡りバテレン隠れ里 ほら豆よ花をご覧と弾む声	朱美 瑛三 和江 かな子 邦夫 恵子 堯子 太美子 輝子 兵十郎 茉衣 眞知子 翠 盛雄 安廣 遊子 乱
--	--

ひとこと

山田安廣

漸く春らしい日が来たと思つたら、今度は初夏を
思わせる昨今ですが、皆様にはお変わりなくお過ご
しの事と存じます。

合同句集では思わぬ校正漏れが有り、皆様方には
大変ご迷惑をお掛け致しました。改めてお詫び申し
上げます。

今回は例会の後、今後の会費の在り方についてフ
リートーキングを行いました。皆さん、「ある程度の
会費の値上げはやむを得ないが、値上げ幅を少なく
するため会の在り方について、抜本的な変更を含め
て色々検討するべきでないか」とのご意見でありま
した。運営の改善について引き続き検討を重ねて行
きたいと考えております。